

シノハラ ヒロユキ

氏 名	篠原 寛之
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 記 番 号	博第1157号
学位授与の日付	平成31年3月27日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
学 位 論 文 題 目	建築物の言語描写の擬態語表現における即物と具体の様相からみる 建築の感性的思考 (Sensible Cognition in Architecture through Mimetic Word Expression of Material and Embodied Architecture in Textual Descriptions of Buildings)
論 文 審 査 委 員	主 査 教授 北川 啓介 教授 麓 和善 准教授 夏目 欣昇 准教授 恒川 和久 (名古屋大学)

## 論文内容の要旨

本論文は、建築物の設計者による言説を通して、建築物の言語描写の擬態語表現における即物の様相と具体の様相の分析及び考察から、建築における感性的な思考について論じたものである。

ものであり、そして意味をもつ建築の認識や解釈は、建築物を設計する設計者やそれを体験する利用者の感性によって媒介される。設計者は、建築物の肌触りや見え方、実空間における印象や心理作用といった人の受ける感覚を考慮しながら建築物を設計する。また、建築の創作の過程には、設計概念や論理による思考に加え、直観やひらめき、そして設計者の洗練された建築や空間への感覚による発想や発見が含まれており、それらが錯綜しながら思考されひとつの作品が誕生する。したがって、建築の創作や設計において感性は、概念的な思考や論理とともに建築的思考の重要な一部をなしていると考えられる。

設計者の建築に対する感性は、設計者が建築作品を説明する際に用いる、感覚印象語である擬態語による表現などの中にみてとることができる。擬態語の音韻が示す感覚に則って描写される建築物や空間の表現は曖昧さがあり、客観的で確固たる建築の概念を表明し

ているとは言い難いが、読み手に強い印象を与え、設計者がひとつの概念として言い表せなかった建築のある様子に込めた意図や思いを映し出していると考えられる。

本論文は、感性という観点から、擬態語の語感の感覚にのせて語られる建築物や空間を題材として、多数の建築家の言説を考察することにより建築の創作や設計における建築的思考を総じて論じるものである。これまで建築家の言説のある論理や概念に着目し建築的思考を総体的に論じた創作論・設計論は多くあるが、感性という主観的で漠然とした人の側面に焦点を当てた建築の論考は、特定の建築空間の利用者の心理実験による研究などに限られている。したがって、本研究の成果は、建築の思考の枠組みを捉える新たな知見を示すものとなり有意義であると考えられる。

第1章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往の研究を整理した。

第2章では、研究の論理として、分析を進めるうえで基盤となる感性、擬態語表現、即物と具体の考え方を説明した。そして、分析対象とその選定基準を定め、分析方法を決定し、各章の位置づけを明確にし、研究の流れと構成を示した。

第3章では、建築のものとしての側面を主眼に、設計者が自身による建築物を解説した記述文の中から、建築空間を描写する際に用いた擬態語表現に着目し、建築の即物の様相を考察した。そこで、擬態語によって表現される建築の即物の様相が文章中で表す意味を特定するために、擬態語の語義として基本義、また擬態語を取り巻く周辺用語として主体・規定語を定義し、それぞれの語句の相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向の組み合わせを比較考察することで擬態語表現における建築の即物の様相を導出した。

第4章では、建築の意味としての側面を主眼に、設計者が自身による建築物を解説した記述文の中から、建築空間を描写する際に用いた擬態語表現に着目し、建築の具体の様相を考察した。そこで、擬態語によって表現される建築の具体の様相の文章中の意味を特定するために、擬態語の語義として基本義、擬態語を取り巻く周辺用語として主体・表出概念を定義し、それぞれの語句の相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向の組み合わせを比較考察することで擬態語表現における建築の具体の様相を導出した。

第5章では、第3章と第4章で導出した擬態語表現における建築の即物の様相と具体の様相とを合わせて総合的に考察した上、それらを横断的に比較考察することで、擬態語表現における即物と具体の様相からみる建築の感性的思考に対する論考をした。

第6章では、各章の流れと結果を総括し、また、今後の課題と展望を述べた。

## 論文審査結果の要旨

ものであり、そして意味をもつ建築の認識や解釈は、建築物を設計する設計者やそれを体験する利用者の感性によって媒介される。設計者は、建築物の肌触りや見え方、実空間における印象や心理作用といった人の受ける感覚を考慮しながら建築物を設計する。また、建築の創作の過程には、設計概念や論理による思考に加え、直観やひらめき、そして設計者の洗練された建築や空間への感覚による発想や発見が含まれており、それらが錯綜しながら思考されひとつの作品が誕生する。したがって、建築の創作や設計において感性は、概念的な思考や論理とともに建築的思考の重要な一部をなしていると考えられる。

設計者の建築に対する感性は、設計者が建築作品を説明する際に用いる、感覚印象語である擬態語による表現などの中にみとることができる。擬態語の音韻が示す感覚に則って描写される建築物や空間の表現は曖昧さがあり、客観的で確固たる建築の概念を表明しているとはいえないが、読み手に強い印象を与え、設計者がひとつの概念として言い表せなかった建築のある様子を込めた意図や思いを映し出していると考えられる。

本論文は、感性という観点から、擬態語の語感の感覚にのせて語られる建築物や空間を題材として、多数の建築家の言説を考察することにより建築の創作や設計における建築的思考を総じて論じるものである。これまで建築家の言説のある論理や概念に着目し建築的思考を総体的に論じた創作論・設計論は多くあるが、感性という主観的で漠然とした人の側面に焦点を当てた建築の論考は、特定の建築空間の利用者の心理実験による研究などに限られている。

第1章では、本研究の目的と意義を示している。また、関連する既往の研究を整理している。

第2章では、研究の論理として、分析を進めるうえで基盤となる感性、擬態語表現、即物と具体の考え方を説明している。そして、分析対象とその選定基準を定め、分析方法を決定し、各章の位置づけを明確にし、研究の流れと構成を示している。

第3章では、建築のものとしての側面を主眼に、設計者が自身による建築物を解説した記述文の中から、建築空間を描写する際に用いた擬態語表現に着目し、建築の即物の様相を考察している。そこで、擬態語によって表現される建築の即物の様相が文章中で表す意味を特定するために、擬態語の語義として基本義、また擬態語を取り巻く周辺用語として主体・規定語を定義し、それぞれの語句の相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向の組み合わせを比較考察することで擬態語表現における建築物の即物の様相を導出している。

第4章では、建築の意味としての側面を主眼に、設計者が自身による建築物を解説した記述文の中から、建築空間を描写する際に用いた擬態語表現に着目し、建築の具体の様相を考察している。そこで、擬態語によって表現される建築の具体の様相の文章中の意味を特定するために、擬態語の語義として基本義、擬態語を取り巻く周辺用語として主体・表出概念を定義し、それぞれの語句の相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向の組み合わせを比較考察することで擬態語表現における建築物の具体の様相を導出している。

第5章では、第3章と第4章で導出した擬態語表現における建築の即物の様相と具体の様相とを合わせて総合的に考察した上、それらを横断的に比較考察することで、擬態語表現における即物と具体の様相からみる建築の感性的思考に対する論考をしている。

第6章では、各章の流れと結果を総括し、また、今後の課題と展望を述べている。

以上の成果は、2つの日本建築学会計画系論文集（審査有論文）へ掲載されており、建築計画や建築設計の分野において建築の思考の枠組みを捉える新たな知見を示す点で有意義で貴重な研究成果であり、次なる展開も期待されている。

以上、本論文は、博士論文として相応しいと判断する。